

From JPMA

日本の新薬創出力の向上にむけて



日本製薬工業協会
会長 中山 讓治

日本のライフサイエンス分野のイノベーション力をさらに伸ばす鍵となるのは、日本に強力なエコシステムを構築することです。オープンかつボーダーレスで、米国をはじめとする海外ともつながるエコシステムを創り出していくことが重要です。

日米の産業構造の違い

創業環境が最も優れている米国のエコシステムを見てみますと、そもそもその産業構造全体が以下の通り日本と大きく異なっています。

- 米国は世界の医薬産業の中で最大の力と規模をもちますが、その背景には領域ごとの競争と競争によって産出された狭義・広義のエコシステムが存在しています。米国は世界の医療支出の40%弱(9兆ドル)を占めていますが、日本は約7%程度です。
- 研究段階では米国国立衛生研究所(National Institutes of Health、NIH)、臨床開発では米国食品医薬品局(Food and Drug Administration、FDA)がルールメーカーとなり活発な競争を促しています。
- 川下の医療サービスや医療保険産業は、多様かつ競争的でイノベーションを強く誘引しています。
- 米国のエコシステムは、他国企業や他国製品も含めてイノベティブな医薬品のインキュベーターとして機能してきました。

こうした点から、日本の創薬力を米国と比較しますと、産業構造の差が創薬力の差に結び付いていると思われる。

日米のエコシステムの違い

今後、薬の中心が新しいモダリティに移るようになると、日本と米国の創薬力の差がエコシステムの強弱によってさらに大きくなると考えられます。

エコシステムには、狭義のエコシステムと広義のエコシステムが考えられ、狭義のエコシステムは、アカデミアやベンチャー企業で見出されたシーズを製薬企業が製品化する流れです。これに対して広義のエコシステムでは、NIHによる研究開発支援や規制当局であるFDA等、国を挙げた産業振興、支援があります。また、医療機関も相互に競争しており、優れた医薬品の開発に積極的にかかわっています。川上から川下まで、バリューチェーンが効率よく連携し、革新的な新薬創出を後押ししています。

米国における新薬の種は60%以上がバイオベンチャーで発見されたこと、すなわちエコシステムの力がわかります。

日本の技術移転やベンチャー創出の状況を米国と比較してみますと、バイオベンチャー設立の基礎となる大学からの技術移転体制の整備が不十分であり、民間ファンドや政府のバイオベンチャー向けの資金の充実が望まれています。

政策課題

こうしたことから、今後、特に以下3つの政策課題を推進することが必要であると考えます。

まず、第1に、情報インフラの構築です。具体的には、ゲノムや臨床データを含む健康・医療情報データベースの構築、アカデミアや産業界の研究者のデータ活用のための法整備を含む環境の整備、医療ビッグデータの解析プラットフォームの構築等です。

第2には、基礎研究への十分な資金供給が必要です。国の資金だけに依存するのではなく、産業側からも資金が流れるよ

うな仕組みを作ることも重要だと思われます。

そして、第3に、エコシステムの構築、特に日本国内に閉じたエコシステムではなく、米国のエコシステムともつながる、グローバルでボーダーレスなエコシステムの構築が望まれると思います。

(BioJapan 2018 基調講演より)

日本製薬工業協会(製薬協)

Japan Pharmaceutical Manufacturers Association (JPMA)

製薬協は、病院、診療所などの医療機関で使われる医療用医薬品の研究・開発を通じて世界の人々の健康と福祉の向上に貢献することをめざす、研究開発志向型の製薬会社が加盟する団体で、1968年に設立されました。

製薬協は、「患者参加型の医療の実現」に向けて、医薬品に対する理解を深めていただくための活動、ならびに製薬産業の健全な発展のための政策提言などをおこなっています。

製薬協は、国際製薬団体連合会(IFPMA)の加盟団体として世界の医療・医薬に関わる諸問題に対応し、各団体と連携を図りながら、グローバルな活動を展開しています。

新薬の開発を通じて社会への貢献をめざす 日本製薬工業協会